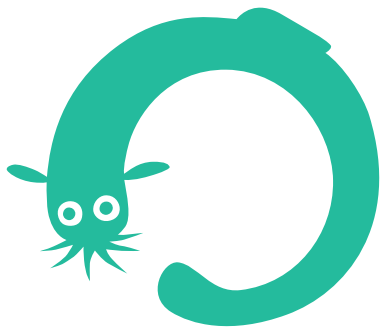


そうかわせみ、



創刊号

そ
う
か
わ
せ
み、

創刊号



一色真理

し 2

復讐 5



伊藤浩子

歩く人 12



相沢正一郎

枕草子2010 24



岡島弘子

門の中の音 26

創刊のことば 27

し

私は黒い。私は文字だからだ。私はあの人が母を愛し、「ああ……」
とうめいて母の上にもらした小さな、さびしい文字だからだ。

あの人は母を捨てた。一枚の白い紙は風に吹かれ、人々の靴底に踏
みつけられ、薄黒く汚れていった。けれど、私は母よりも、泥より
も、夜よりももつと黒かった。私は母の体から消えることのない、
真つ黒な痣のようだった。

街角に投げ捨てられていた母を拾い上げ、私に気づき、読んでみよ
うと目を凝らした人もあった。だが、紙きりは逆さだった。読めな
いまま、「わからない」と呟くと、その人は私たちのことを忘れた。

その度に、私は怒りのために、もつともつと黒くなっていった。不
夜城と化した雑踏の下で踏みつぶされ、足蹴にされ、無視され、母
といっしょにぼろぼろになっていった。誰にも理解されることのない

いまま。

ある日、大雨が降った。母親に連れられた小さな少女が、ずぶ濡れ
になり、何もかも洗い落とされた一枚の紙きれを拾い上げた。「こ
の紙、死んだパパのように真つ白だね。もう息をしないみたい
……」黒いワンピースを着た女の子は、やっばり上から下まで真つ
黒な服装の母親にそつと話しかけた。

「そうね。この紙には何を書いてあったのかしら？」黒い女の人は
首を傾げて、白い紙に長い間、目を落とした。「あら、ここに一つ
だけ字が書いてあるわ……」

覗き込んだ女の子はうれしそうに叫んだ。「ほんとう！ あたし、
この字が読めるわ！」

私はこおどりました。とうとう私も人に読まれ、わかってもらえる日
がやってきたのだ。私は何という字なのか。あの人は母の体に何と
書いてくれたのだろうか？

黒い女の子は大きな声で、私を読んだ。いや、私は呼ばれたのだ。生まれて初めて、私の名前を。さっき、女の子がお葬式の会場で覚えてたばかりの、一つの言葉で。

「し…」

あの人は母の体にそう書き残して、この世界からそっと消えていったのだ。誰にも知られず、たった一人で。

復讐

忘れてはいけない言葉をつかまえたら
必ずメモをしなさい！

あなたはそう言って、ぼくを殴った
でも 紙に書いただけでは
メモはどこかへ行ってしまおう

アオスジアゲハだつてハナムグリだつて
生きていたからみんな
どこかへ行ってしまったのだ
捕虫網や虫かごに

何かの文字の「偏」や「旁」のような
小さな肢や翅の切れ端だけを残して

だから書いたメモは必ず虫ピンで
目の前の壁に留めておきなさい！

あなたはそう言って
またぼくを殴った
ぼくが鼻血を出してもかまわず
殴った
右のこぶしで
ぼくを殴った 殴った
ハエトリグモやナナホシテントウを
小指でひねりつぶすみたいに
殴った 殴った 殴った

* *

お父さんの秘密の書斎をそつと覗いたことがあります
そこではいつも色鮮やかな
クジャクタテハやアキアカナが
生きたままはりつけになっていましたね
もう飛ぶことも泣くことも叫ぶこともできずに
みんな裸で 全身をぶるぶると痙攣させながら

傷口からいつまでも血を流し続けていましたっけ

虫の血は赤くありません
知っていましたか？

お父さん——言葉の血が何色をしているか

* *

あの日 ぼくは夢を見たのでしょうか
秘密の書斎のドアの鍵穴を
いつものように覗き込んだとき
そいつを見てしまったのです
ぼくの小指より太い胴体をいやらしくくねらせながら
一匹のオニヤンマが裸のお母さんを六本の肢で押さえつけ
むさぼり むさぼり 食べているのを
黒と白の虎縞の胸の上には
お父さんそっくりの大きな首がついていて
その頭の上には二本の角が生えていました

そして オニヤンマはゆっくりと振り返り
ぼくを見たのです

ぼくは夢を見ていたのだと思う
気づいたときぼくは
そいつを殴っていた
殴って 殴って 殴って
つかまえたそいつの太い胴体を虫ピンで突き刺すと
一枚のメモにして留めた
お父さんの秘密の書斎の
壁の上に高々と
生きたまま そいつを
はりつけにしたのだ

でも学校から帰ってみると
ぼくのメモはやっぱり
どこかへ消えてしまっていた
壁にはお父さんの右手の

小指だけがちぎれて留められていて
オニヤンマのお尻の汚い臭い血が
部屋中に飛び散っていた

しかたがないので
復習をしようと
ぼくが勉強部屋に戻ると
机の上にぼくの失くしたはずのメモがあった
そして床も壁もベッドも血だらけだった
ここまで虫の息で逃げてきて
そいつはどうとう息絶えたのだ
苦しそうに折り曲げた太鼓腹の胴体の上に
本物そっくりのお父さんの首をつけたままで

* *

気がつくとも 後ろにお母さんが静かに立っていて
メモには何を書いてあったの？とぼくに尋ねました

でも 死んでしまった言葉はもう思い出せません

「お父さんを愛している！」だったのか
それとも

「お父さんを殺してやる！」だったのか

* * *

ほら お父さん

これが今日ぼくの書いた詩です

みんな ぼくが虫ピンで

生きたまま留めておいた

忘れてはいけないメモの言葉で出来ています

今はぼくが一人で使っている

秘密の書斎の壁に

この詩を はりつけにしておきますね

いつかあなたが生き返ってきたとき

読んでくださるように

もうぼくは言葉を決して取り逃がしたりしません

あなたに殴られて 殴られて

何度も 何度も ぼくは復習したのですから

苦しませずに言葉の心臓を

虫ピンでひと突きにするやりかたを

知っていましたか？

お父さん――

言葉の流した血はいつまでも

けっして乾かないってこと

*本作は詩誌「投擲通信」六七号に発表した作品「現代詩の書き方」の
オリジナル・ヴァージョン。同誌では誌面上の制約等から短縮して発
表した。

歩く人

歩く人がやってくる。

彼が歩いてやってくる姿を私は今まで何度も見かけてきた。本当にもう、それこそ、数えきれないほど。

そのうちに、いつしか彼——いや、やはり彼の呼び名は「歩く人」だ——の姿を見ることが、私の大切な楽しみになり、やがてだいじな日課になってしまった。

私が出かけるのをサボり、会わなかったりすると、次の日、ちよつとひどいことになる。例えば、肩が懲りすぎていたり、口内炎ができていたり、そうそう便秘になってしまったり。そういうわけで、夜の一番深い時刻に、必ず出かける。

雨がどんなに激しく降っていても、空がどんより曇った夜でも、あるいは歩く人や私自身が「今夜は歩きたくないし、歩く必要もないかもしれない」と感じたときでも（そういう夜が歩く人にもぎつとあつたはずだ）、いつも決まって同じ時間、同じ場所。私たちが出会わない夜はない。

最初はただすれ違うだけだった。

歩く人は、病院脇にある比較の大きな直線道路の歩道の道路側を、七〇〇mほど先のほう

からまっすぐこちらに向かって歩いてくる。

両腕を大きく振っている。

顎をきゅつと下に引いているので、顎の先つぼが喉につきそうなほどだ（顎が上を向いているのは、息が切れている証拠）。

濃紺色のキャップを目深にかぶって、上下揃いのメタリックなスウェットを着用している。そして重さがほとんど感じられない、スニーカーを履いている。色はブルー、夏空を思い出させる色だ。

それが歩く人。

遠くから見れば、歩く人はまるで三c mほど宙に浮いて、その分の厚みの空気の上を、すいすいと、ローラースケートのようなもので滑ってくるかのように見える。そのくらい、歩く人は速やかに、そして滑らかに、まっすぐ歩く。

私が一分間に、やつとの思いをして二十五mしか前に進めないのに対し、歩く人の速さは、私のだいたい三倍にもなる。

だから私たちは今からおよそ七分後にすれ違う。私は頭の中で、その七分間をできるだけ正確にきつちりと計ってみる。

そして、さあ、というふうに、これから出会うための準備をする。

深く息を吸い込んで静かに吐き出し、姿勢を正して。

車道側の真横から歩道の方を、ストップモーションでちよつと想像してみてほしい。だつ

て、実際、それはストップモーションのような一瞬なのだから。

私は舞台の下手から上手方向へ、歩く人はもちろん上手から下手へと、とてもゆつくり、その一瞬が月明かりに溶けてしまつて、そこら中が月の海水で水浸しになつたかのように、とても静かに、ものごとは進んでいく。

しつ。

もう少しだ。

ずっと前に何が待っているか互いに知らず、けれど歩く人も私も、わき目もふらず前だけを見据えて歩く。少なくとも歩く人が余所見をするのを見たことがない。

足を引きずるような私の歩き方に比べ、近づくにつれ見えてくるのは、歩く人のつま先が勢いよくアスファルトを蹴り、すぐに右太ももが地面に対し平行に上がり、そして、踵が着地すると同時に、今度は左足と左太ももとが、右脚と同じように動く姿だ。歩く人のそういう規則正しい丹精な動きが、遠くからだど、滑っているように見えるのだ。

なぜ、その動きが、私だけに特別に綴られたメッセージであるかのように、心に真つ直ぐ届いてくるのだろうか？

私は歩きながら考える。

右…、左…、右…、左…、歩く人は誰よりもリズムカルで、そして無駄がない。

もう一度言うけれど、私ではなく、歩く人の方がいつも歩道の車道側を歩いている。

だから、すれ違ふとき、私の身体は、歩く人の細い（薄い）体に隠れて、車道という客席

から一瞬消えて見えなくなる。

私はその瞬間、自分がどこ別の場所へ連れ去られてしまつたような感覚を覚える。

誰からも遠ざけられた、秘密の場所。

歩く人と私しか、知らない場所。

個人的には、必然といえれば必然的な話だと考えているのだけれど、その一瞬が地球の公転のように永遠に続くかと思えるのだからとても不思議だ。

そう予感するだけで、私の心臓は勝手に鼓動を早める。鎮めようとすればするほど、鼓動はますます早くなり、心臓が喉元にせりあがる。だから私はそのときいつも自分が月になつたことを想像する。暗い宇宙空間を、列にならつて公転しているのは歩く人の方で、私はその周りをただぐるぐると回つていけばいい。そう思うと少しだけほつとする。

あるいは硬い甲羅に覆われた、臆病な亀、というのはどうだろう？ 自分の鼓動は海水には伝わるけれど、空気には伝わらないのだ。

ちらつと目を上げ、歩く人の顔を見る。

遠い昔、出会つた誰かに似ているような、鼻から口元にかけての表情。

二人の間を風がよぎるまで、もう一秒もない。

今、私は歩く人の存在を右腕すれすれに感じている。六月の、水気を含んだ冷たい風が腕の皮膚を切るようだ。だが、その風のことを、これ以上どのように説明すればいいのか、私はそのための言葉を探し出せない、今のところ、とても残念なことに。

ただ感じて欲しい、としか言えないのだ。
すべての人にこの風を知ってもらいたい。

この風が未来に向けて何かを運んできてくれることを感じて欲しい。
そして、風があつという間にどこかに過ぎ去ってしまったことを、私は何よりうれしく思う。今はもう傷跡のような名残が二の腕にかすかに残っているだけだ。

だからこそ、私は歩く人に出会い続けたのかもかもしれないとぼんやり思う。あんまりぼんやりしすぎて、私は自分がそのときどこにいるのかさえ、分からなくなってしまう。

どこか分からないその場所にぐるぐる顔を向けて、私は思う、その風は、きつといまごろ、私たちと同じような二人の間を、吹き抜けているだろう、と。

私たちは誰とも出会わなかったかのように、もしくは誰かとても大切な人と出会ったのに、それが誰なのか思い出せないかのように、歩き続け、その場を去る。

(後ろを振り向きたい衝動にかられるが、でも絶対に振り返らない。なぜなら、歩く人も、後ろを振り返っていないということが、確認しなくても自然に伝わってくるからだ。)

何十回目かの夜、いつものように私は歩く人と出会った。

それは新月の、真つ暗な夜だった。等間隔に並んだ電灯に、ずい分たくさんの虫たちが集まってきていた。ものすごい量の虫が集まってきていて、灯りがほとんど見えない電灯もある。

れば、まったく虫のいない電灯もある。私は何とはなしに、その様子を下から見上げて歩いていた。
七〇〇m先、歩く人はいつものように、キャップをかぶり、スウェットを身に付け、スニーカーをはいてやってきた。

けれど、その夜、歩く人のすぐ後ろに、女の人が続いていた。小さくて細くて鎖骨のくつきり浮かんだ、少女のようなかわいらしい女の人だ。

予想がつくことだとは思うけれど、私はその夜、どうしても、歩く人(と、その女の人)との間に、あの六月の風を感じる事ができなかった。私はとても長い間、右側にふたりの存在を感じ、もう前に進むことも後ろに退くこともできなくなってしまっていた。

でも、前に進むってどういうことなんだろう？ 後ろに退くって？
私が自分に問いかけているまさにそのときに、女の人が話し始める。

だって、あなたはいったってここに戻れなくなってしまうでしょう？ いっただってそうじゃない。それがどんなに迷惑なことか、あなた、そんな年にもなって、まだ分からないのかしら？

高いソプラノで歌うようにしゃべる声だ。この歌声には聞き覚えがある、動かなくなった足を見つめながら、私は思う。

そう、それはまだ私が幼かった頃の母の声だ。耳がきんきんするようなソプラノだ。彼女が私を諭すときの、真つ赤な口紅そのもののような声だ。

どうしてもあの薄桃色の服を着た人形が欲しい、だから母の手を振り切って、私はさつきのおもちゃ売り場に戻りたい。

そういうとき、決まって母は私に向かって——私だけに向かって宣告するのだ、だってあなたはいつも自分がどこにいるか、分からなくなってしまうでしょう、と。

私はうつむき、何も答えられなくなる。私に見えるのは、自分の足先と、母の細い足首と、高いヒールのついた赤いパンプスの後ろ側だけ。

ねえ、ちゃんと、ママの話、聞いているの？ 決めた場所に戻ってくる事ができる？ ママにそう約束できる？

母は追い討ちをかけるように私に語り掛ける、でも今度は、さつきより、ものすごくやさしい、一語一語ていねいな、諭されている私でさえうっとり聞き入ってしまいそうなほどの、やわらかいメゾ・ソプラノ。

母のやさしい声に、私はとても恥ずかしくなる。私が私であることが、根源的な罪悪のようには思えてくる。そしてその場で泣き出してしまいそうになる。いつだったか、年若い医者に突然アンダーウェアを脱がされたことがあったけれど、それとまったく同じだ。

頬が真つ赤になって火照っている。

両耳は燃えるように熱い。

私はもつと深くうつむいて、もう何があっても顔を上げることができない。

両目はしつかり、瞬きもせずにあけているけれど、何も見えていない。

心臓の鼓動も、とつくにどこか遠くの暗い場所に吸い込まれてしまった。自分の心の音がまったく聴こえないのだ。

後ろの方から、見知らぬ誰かが、わざとらしいほどの大きな靴音を立ててやってくる。

大人の男の人だ、匂いで分かる。

お父さんだったらしいのに、と私は思う。でも、その男の人は私の父親ではない。

その男の人から漂ってくる煙草の匂いは、いつも嗅いでいる父親の煙草の匂いとはぜんぜん違う。

私はますます顔を上げられない。

ここで顔をあげてしまったら、次の瞬間、どうなってしまうか分かっているから。

口も利けない。

そして頭のでつべんと後頭部とが、いつせいにガンガン音を出して痛み出す。

男の人が母に向かって暗号のようなことを言う。

母がもつと締めっぽい声で笑う。

私は母の赤い口紅を思い出す。

ピンクなんかよりも本当は私も赤が好きだ。でも私は赤が好きだということを誰かに言うたことがない。赤は母の色だからだ。だから、私が赤を好きだと知っている人は、この世界には一人もいない。

できることなら、今すぐ母が、屈み込んで私の顔を覗き、「行つてきなさい、ここで待っているから」と言ってくれるのを願う。

そうすれば、私だつてにつこり微笑むことができる。微笑んだあとなら、すべてを忘れることができる。

でも願いはかなえられない。

願いはいつだつてかなえられずに、朝露のように消えてゆくのだ。

夜の間に、私の知らないうちに。

もつと下を向き、何も見ず何も聞かない振りをして、私はじつと時が過ぎ去るのを待っている。私さえ我慢すれば、これはすぐに過ぎ去ってしまうものだからね、と私は。

そう私は、歩道脇で、幼い少女にそつと言い聞かせる。

少女は私の顔を見上げる。

突風が吹き、二人は車道側に突き飛ばされそうになる。

歩く人と女の人は、少女を置き去りにして、行つてしまった。

私は、今度は彼らの後ろ姿を振り返る。そして、寄り添うふたつの背中をいつまでもいつまでも、米粒ほどになるまで見つめている。

どこまでも真つ直ぐに、そこは私（たち）から離れていくだけの場所なのだ。

電灯が並ぶ、その間隙にふたつの後ろ姿は、明け方の星のように消えてゆく。

明け方の、消えそうな星をずつと見ていたことがある？ 私は見たことがあるんだけど、と少女に訊ねる。

無反応な少女。

棒のような両脚には、何かのしるしのように無数の傷跡が伸びていて、髪の毛はまだとてもやわらかい。頬に涙の道筋が生糸のように光り、目元には恥ずかしさが思い出として残っている。

少女は自分を置き去りにした二人に向かってひとことだけ叫び、そのすぐあとで、風をつかんであつという間に空へと飛び上がる。

今夜は少女自身が、夜の風になる番なのだ。

私は少女に向かって声をかける。

さよなら、と。

少女を見送り、前に向き直るとそこに、歩く人が立っている。

そんなふうにして私たちは出会った。
そんなふうにしてしか、出会えない私たちだった。
歩く人と、私。

私は今、歩く人とこつそり暮らしている。
誰からも遠ざけられた、秘密の場所。

歩く人と私しか、知らない場所。
歩く人と暮らすようになってから、私は散歩するのをやめてしまった。私自身は「歩く人」にはなれないのだ。

そして夜の一番深い時刻に、歩く人を、目には見えない、私たちの小さな家から送りだす。行ってくるよ、歩く人は、聴こえるか聴こえないかくらいの細い声でつぶやいて、決めた道をいつもどおりに歩き出す。

その真つ直ぐな背中に、私は無言で笑いかける。
そつとドアを閉める。

丸い質素なテーブルにつき、私はさまざまなこと思いをめぐらす。
例えば、街中に歩く人のおだやかな心があふれて、夜の深さにその細い影が伸びていくことを。

濃紺色のキャップと、夏色の空に光るスニーカーのことを。そこに重なる夏の思い出のこ

とを。

そして歩く人に七分後に出会う人々のことを。

彼らの心と、彼らの心によみがえる、いくつもの思い出のことを。その哀しみや喜びのことを。

それから、風になって消えていった少年や少女のことを。

そのときを感じる、小さな傷の痛みのことを。

私は頬杖をつき、いつまでも待っている。

いつの間にか月が傾き、部屋の中を明るく照らし出して、そこにあるものごとの輪郭を、より一層はつきりしたものにする。

歩く人はもう帰ってこないかもしれない。

それでも、まだ、私は待ち続ける。

険の裏に、地球の反対側にある、どこかの町が夜明けを迎えているのが見える。
産卵を終えたばかりの一匹の海亀が、月の海に帰ろうとしているのが見える。

興ざめなもの。たちまち太くぼやけていく飛行機雲。朝、血液の循環がとまって重くしびれた腕。味噌汁のお椀のなかで口をあけていない蜆。浴室の切れかかった蛍光灯のまたたき。深くわれずに、いびつになつた割り箸。くずれた豆腐。あかない瓶のふた。まだあたたかい受話器となまぬるい息の残つた電話ボックス。紙パックの三角屋根がうまく剥けなくてギザギザになつてしまつた口から飲む、牛乳の紙っぽい味。車窓で別れの挨拶をした後も、なかなか出発しない電車。エレベーターに残つた菊の香りとお香。自転車の買い物籠に捨てられていた空き缶。

どきどきするもの。公園の水飲み場で蛇口をひねると、噴水みたいに急に飛び出す水。自転車のサドルを踏むとシャーシャー、ダイナモのふるえる音。橋のうへのつよい風。ガードをくぐる頭上に光の飛沫。

気がかりなもの。のどに刺さつた魚の骨。ゆびの棘。のどもとまで

出かかつているのに思い出せない言葉。迷子になつた夢。外に出たがつて、窓ガラスになんどもぶつかると、靴のなかにはいつた小石。ホテルの上の階の部屋で、一晩中あるきまわる靴音。歯の痛み。目にとびこんだ、ちいさな虫。どうしても出てしまふ咳。コートの袖口のぶらぶらのボタン。抽匣の四段目が壊れて開けにくくなつた茶筆筒。

ただ過ぎてゆくもの。帆ではしる舟。ひとの齡。てのひらを赤く染める、門を縛る鎖の錆。はがれかかつた壁紙。手の脂で光沢を失つた把手と、キーキー軋む扉。兎肉シチューのお鍋のなかで緑から茶色に変わる香り草。

うれしいもの。まだぬくもりの残つているスリッパ。たけのこの皮むき。一、二分なにもかも忘れていられる虹。茶柱。ふるい本に挿まれていたチケットの半券。本からふと顔を上げたときに去来するあれこれ。エレベーターに残つていた香水、ピザの匂い、樟脳。貨物列車の屋根につもっている雪。錆だらけの外階段。竹箒で掃いたあとの模様。にぎやかな木漏れ日。きちんとおさまつた釣道具箱。張り替えたばかりの障子紙の清潔な光。青畳の匂い。

門の中の音

おとさたもたえたこよい
洗濯機のスイツチを切る
換気扇のスイツチも切る
エアコンも止める
すべてしずまりかえるなか
あかりを消して 窓をしめ
水の縫い目をひらいて
ふかいねむりにしずみこもうとするとき
ひとつだけ消えない音
門の中いっばいにひびきわたる
私のいのちの鼓動

聞

創刊のことば

長いこと同人誌をやつていなかった。なんと一九九八年からずうつと「ひとり身」だったのだ。作品というのは、やはり発表を意識しないと、最後の詰めができない。それで、同人それぞれが新しい仕事に取り組むための場を作りたいと思った。誌名は同人の間で公募して、一番支持の多かったものだ。メールをやりとりする内、誰かが「」を間違えて打つたので、それもそのまま活かすことにした。意味？ 意味のないものなんて、この世にあると思う？

(二色)

遠野物語の第十四話に、大同の家、つまり旧家にはかならず畳一畳の部屋があつてこの部屋に夜眠る者にはいっつも不思議に遭うとある。枕をかえすとか、誰かに抱き起こされる。あるいは室より突き出される、といった具合で、静かに眠ることが許されない部屋なのだ。そうか、そうかわせみ、も私にとって大同の家の畳一畳の部屋みたいなもので、このスペースをなんとかしないことには気が気ではない。詩と後書でこうして埋めてみたが、果たして今晚は安らかに眠れるだろうか。

(岡島)

私にはわからない、この宇宙がどうなっているのか、宇宙に外側があるのか、温暖化が実際にどうなっているのか、絶滅危惧種はいつ絶滅してしまうのか、なぜこんなにもひとりひとり孤絶しているのか、どうして孤独を思うのか、なぜこんなにも誰かが恋しいのか、それから、なぜ私のようなものが、相沢さん、一色さん、岡島さんのような大先輩詩人と一緒に同人ができるのか？ わかっているのは、とにかくやるしかないってこと。どうぞ宜しくお願いいたします。

(伊藤)

銀行で、渡された用紙の「職業欄」に、週一回、非常勤講師をしていた大学名を記入したとき、女子行員が「あつ」とちいさな声。卒業生だという。英語の山田先生のゼミだという。

翌日、ちいさな食堂のテーブルで、英語、ポルトガル語、スペイン語の先生と相席した。ポルトガル語の先生に紹介された私の目の前の先生の名前を聞いて、「あつ」と思った。

(相沢)

同人住所

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

そうかわせみ、創刊号 2010年8月2日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男
